

選ばれし一本

志水風香

ベッドの骨の冷たさを感じた
チリチリと鈴の音を耳に残す
ミモザの匂いが消える前に堕ちた
悪い肝臓のムズムズが走る
ホルモンを焦がす黒ひげに会いたい
開いた瞳孔を閉じられる四角で残像を残すけど
眠気にからかわれた
押し寄せるシルクで泳ぐ頬 太ももの下に隠れる手のひら
逃げる熱と追い出す身体
水の下には常夏の熊がいた
短い線が遠く感じて 赤いアンテナが立つ
起こすのは警報ではなく雷だった
裏返した雲に甘えれば新品が見える